

乳がん闘病記の内容分析（中間報告）

石川道子¹⁾、石井保志¹⁾、磯野威¹⁾、後藤久夫¹⁾、詫間浩樹¹⁾、和田恵美子¹⁾、
大野直子²⁾、中山健夫³⁾

¹⁾健康情報棚プロジェクト、²⁾東京大学大学院医学系研究科、

³⁾京都大学大学院医学研究科

[背景] 患者・家族が有する「がん情報不足感」は、情報ニーズと情報サービスとのミスマッチから生じると考えられる。これまでの医療者側からの情報だけではなく、受け手である患者・市民が自ら発信する情報をデータベースとして構築し、共有することはミスマッチの解消に資するのではないか。

[目的] 「闘病記」が患者・市民の求めると思われる「医療情報」のどの部分に対応するか。

[方法] 1 内容分析の方法：静岡がんセンターが中心となって作成されたデータベース「がんと向き合った、7,885人の声」に記載されている患者の悩みや負担の分類項目を縦軸とし、時間の経過「受療前」「受療中」「受療後」の3区分を横軸とした調査票を作成した。このTableに闘病記の記述を照合させた。

2.分析対象：乳がん闘病記180冊（115冊分析終了）。

3.分析者：医療情報に関わる人を分析協力者として募集。30名の協力者は、医学図書館員、医学および一般の大学大学院生、看護師、健康相談ボランティア等である。

4.分析の単位：章の中の段落・文節を基準とした。

5.分析手法の標準化：「調査票記入要領」に分析方法・記録の単位の考え方を記載し、不明の部分について特に調査票の横軸である時間経緯区分の境界、または縦軸の項目外の新規項目の作成基準等の標準化を行うために分析者とプロジェクトメンバーとのメール上で意見交換を行った。

[結果] 分析記録総数2383件（闘病記115冊）：内訳①時間の経過－「受療前」564件（23.7%）、「受療中」1308件（54.9%）、「受療後」511件（21.4%）、②分類項目－A「医療情報・診療情報」総数595件（内訳「受療前」140件（17.9%）、「受療中」356件（63.7%）、「受療後」99件（18.3%））、分類項目－B「心情・生活情報」総数1788件（内訳「受療前」424件（24.9%）、「受療中」952件（52.9%）、「受療後」412件（22.1%））。

「受療前」は病気以前（知る以前）の生活への思いや自分史が多く、心身の異変への気づき・不安が特に記載されていた。「受療中」は項目全般について記述が見られたが、特に入院生活を中心として医療者・医療機関との関係性が目立った。「受療後」では、退院後も続く闘病生活の主であったが、受療前・中の振り返りも見られた。

[考察と課題]

1.闘病記は「受療前」、「受療中」、「受療後」を広くカバーする情報源である。

2.記述された「医療情報・診療情報」は受療中に多く、「心情・生活情報」は全般に及ぶ。

3.患者の情報ニーズは「受療中」に多く、分類では退院後の闘病生活に関する記述が多い。

分析回収後の分析者へのアンケート調査回答結果を含めて、研究の計画・実践において以下の課題が考えられた。1.分析者との意見交換を深める。2.闘病記の多様な構成と時間経緯3区分の整合性を再検討する。3.分析の記録単位とその数値化の検討と評価への理解を高める。4.分析者により設定された分類項目外の記録の数値化を行う。